

第 387 回 ATIS 例会報告

2/15(水)、住友化学(株)参宮寮にて第 387 回 ATIS 例会を開催しました。35 社から 77 名の参加があり、代表幹事の報告に続き、分科会活動の中間報告と東京工業大学の高橋栄一教授による講演が行われました。

先ず 6 つの分科会から、本年度のこれまでの活動内容や今後の予定が説明されました。



調査分科会は事業運営面の課題をテーマとする調査業務運営グループと、実務面の課題をテーマとする調査技術グループの 2 つに分かれ活動しています。調査業務運営グループでは若手人材の確保、調査依頼の受注、受注案件での事業変化への対応等について、調査技術グループでは検索競技大会の問題を使った検索演習を通じメンバー間で意見交換等の報告がありました。また、特許庁との意見交換会についても紹介されました。

知財分社経営分科会からは3つのポイント、① 顧客の望む調査業務内容、② AI 技術の進歩と特許調査業務の在り方、③ 新しい働き方や日本型雇用について議論を進めていることが報告されました。

コーポレートサポート分科会からは、① 震災体験学習施設「そなエリア」での震災体験学習と体験者講演会、② 若手分科会との意見交換会、③ 女性やシニアの活用、④ 有期雇用社員の無期雇用転換、⑤ 表彰制度などについて報告がありました。今後の活動として、防災と企業の安全配慮、ダイバーシティ、働き方改革、若手による意見交換分科会との合同分科会開催を進める予定があることが報告されました。

特許情報研究分科会からは、EPO 訪問報告、各国ドシエ取得ページの機能比較、中国特許情報年会(PIAC)視察ツアー参加報告等による世界各国の知財情報収集に加え、活動の軸として AI が 2025 年には自然言語を理解できるようになるという前提で、10 年後の AI と知財業務の関係がどうなるかをシナリオ・プランニングの手法を使って検討していることが報告されました。

新興国の知財調査分科会からは、パテントクリアランスの実施可否からの観点でのデータベース調査と、新興国の知財情報収集と共有化とを 2 本柱として活動を行っており、今年度は、特にインドに注力していることが報告されました。具体的な活動内容の紹介として、商用データベースのインド特許の収録状況の比較、新しくなったインド特許庁のデータベース紹介、インドの特許出願の番号体系の変更等の説明がなされました。

若手による意見交換分科会からは、今後の知財関連活動を担う若手、中堅社員を中心に互いの業務特有の状況や課題の共有、情報交換や議論を通じキャリアパス、モチベーションアップ、各社の活性化に繋がることを目指し、現在は「各自の課題」を「全体で議論」「各自の今後の対策案」をまめる活動中であることが報告されました。今後、分科会有志が、視野拡大のため中国・大連の現地事務所と知財管理会社を訪問する予定であることも報告されました。

それぞれ質疑が行われ、各分科会とも活発に活動が行われており、最終報告での成果を期待させる発表でした。

続いて、東京工業大学 附属図書館長、教授 高橋 栄一氏（理工学研究科 地球惑星科学専攻）を講師にお迎えして「巨大地震と火山活動：富士山研究の最前線」をテーマに講演が行われました。



第 1 部では、高橋先生の研究室の「マグマファクトリー」についての紹介があり、高温高圧実験装置と実験手法を開発し、開発した手法を使って地球内部で起きていることやマグマの起源を探る研究をされていることを説明いただきました。

第 2 部では、3. 11 のような巨大地震と、火山活動の活発化との因果関係について説明いただきました。1611 年に起きた慶長三陸地震と 1600 年代半ばの北海道の駒ヶ岳火山、有珠火山、樽前火山の噴火との関係から、良く知られている地震後数日以内、あるいは数か月以内に起こる噴火（例えば、宝永地震と富士山の宝永噴火）以外に、30～50 年という長い期間をおいた後に火山活動が活発化する可能性があると考えていること、火山活動予測のためには火山の深部構造とダイナミクスの解明が必要であること等を教えていただきました。

第 3 部では、富士火山の研究の最前線について説明いただきました。まず、富士火山は他の火山とは異なる特徴を有しており、例えば北米プレート、ユーラシアプレート及びフィリピン海プレートの3つのプレート境界に位置していること、他の火山から噴出されるマグマは安山岩質や流紋岩質などを含むマグマであるのに対し、富士山のマグマは玄武岩質のみであることをお話いただきました。このような特殊性と、高橋先生の研究室での実験結果や各種専門家の研究結果から、富士山の噴火の可能性を探るには、

- 最近 200 年間明瞭な火山活動はないが、深さ 10～15km では非常に活発な低周波地震が起きている
- 深さ 10 km 以浅のマグマ溜りを安定に維持しにくい構造を持っている
- 宝永噴火の玄武岩マグマは深さ 25km のマグマ溜りから噴出したと考えられる
- 富士火山の下深さ 25～40km には大きなマグマ溜りがみられる

といったことを考慮する必要があると教えていただきました。

ご講演の終わりに高橋先生から「巨大地震から 30～50 年という長い期間をおいた後に火山活動が活発化する可能性がある」と論じたからには、3.11 震災との因果関係の結果を見てみたいと思うようになり、健康管理に気を付けるようになった」との如何にも第一線の研究者らしいお話もありました。地震と火山活動の関連だけではなく、富士山の地下がどうなっているのかを知ることができ、また活発な質疑応答もあり大変興味深いご講演でした。

以上